



# 北総モラルアップ通信

～チーム北総 思いを伝え合い認め合う職場づくりのために～

学校が徐々に再開し、子供たちの元気な姿があちこちで見られるようになりました。再会を喜ぶ子供たちの声に、ほっとした方も多かったことでしょう。

一方で、教職員の皆さんは、感染防止のために、消毒や換気、三密の解消に向けて懸命に取り組んでいただいていることと思います。学校は再開したものの、カリキュラムや行事の改編、縮小などもあり、平常時とは違う環境、体制の中で、指導に苦慮する場面もあると思います。

そこで、今まで以上に子供たちや保護者との信頼関係を築き、学校教育がより一層充実したものになるよう、今回の「北総モラルアップ通信」では、「体罰の根絶」について取り上げていきます。

教職員、児童生徒、保護者、地域が一体となり、このピンチをチャンスに変えて、乗り越えたいものです。

## 今月のテーマ「体罰の根絶」

チーム北総5S+1

Speciality:教育のプロとして、効果的な指導法を実践する。

### 体罰にまつわる誤解

#### 保護者が認めれば…？

先生、うちの子供には、厳しく指導してください。



教員の私自身も、子供の頃に体罰も含めて厳格に育てられた経験があるので、躰の手段として、体罰は必要だと思う。

保護者からも、そのように要望されたのだから、多少の体罰は容認されるだろう。

保護者の願いを理解することは大切ですが、「厳しさ」とは、怒りにまかせた言動や、恐怖を与える指導のことではありません。また、体罰を「躰」の手段と解釈するのも誤りです。児童生徒の実態、家庭での様子などを十分に勘案して、体罰に頼らずに指導する方法を考えましょう。

#### 信頼関係があれば…？

子供への熱意や思いを説明すれば、多少の体罰や、怒鳴るなどの指導の意図を、必ず分かってもらえると思う。



教員と子供の上に信頼関係があれば、多少の体罰を加えたり、冗談を言って、からかったりすることは、容認されると思う。

どのような理由や思いがあっても、暴力、暴言を加えれば、児童生徒にとっては、苦痛やみじめさが先行し、その真意は伝わらなくなってしまいます。信頼関係があればこそ、一人一人の気持ちに寄り添って指導することが大切です。

#### 熱意があれば…？

教育への情熱があり、子供を傷つける意図が無ければ、口頭で厳しく叱咤しても差し支えないと思う。



子供は、厳しく叱咤することで、「なにくそ！」という反骨精神をもって、さらに成長できると思う。

目標を高く設定することで、力を発揮し伸びる者や、それをプレッシャーに感じる者など、様々な児童生徒がいます。成長を期待する熱意と同様に、一人一人の実態に応じた適切な指導をすることも、教職員の大切な資質です。人権や人格を傷つける言動は、あってはなりません。

## 体罰根絶に向けて…Let's Check!

- 「子供に甘くみられてはいけない。」という気負いや焦りはないか。
- 体罰は人格を傷つける行為であり、児童・生徒の人権を侵害する行為であることを認識しているか。
- 問題を一人で抱え込まず、他の教職員や保護者と連携した指導ができていないか。
- 「子供のためである」等の理由で、安易に叩いたり暴言を吐いたりするなどの体罰を行っていないか。
- 体で覚えこませないと分からないという思い込みをもっていないか。
- 指導場面において人間性まで否定するような言葉を使っていないか。
- 児童生徒への指導には体罰が必要だと考えている同僚がいることをよいことに、体罰を容認する意識をもっていないか。
- 他の教職員の体罰や暴力を傍観したり、見過ごしたりしていないか。

### ☆コンゼツ・ノ・ヒント☆

体罰が法令で禁止されている行為であり、教育効果がないということについて、教職員であれば誰もが認識しているところですが。しかしながら、教育現場で体罰が起きてしまうのはなぜでしょうか。体罰に至るほどの「怒り」ほどのような感情によるものなのでしょうか。

- ・子供の言動が、自分のイメージ通りの反応ではない。
- ・期待した通りの成長が見られない。
- ・何度も同じ注意をしているのに改善が見られない。
- ・周りに迷惑をかけたり、危害を加えたりしている。
- ・子供の考え方や言動が、自分の価値観と違っている。

そのような時に  
かけている言葉とは…



- ・「何度も同じことを言っているのに、いい加減にしない。」
- ・「注意をされているのに、その顔つきや態度はなんだ。」
- ・「あなたのことを心配して注意しているんだ。」

戦後東京都内の新制中学で国語教師として教鞭をとられ、国語教育研究者としても活躍された「大村はま先生」の著書に次のような内容が記されています。

#### 「自然に背筋が伸びるようにするのが技術です」

「よく読みなさい」「じっくり考えてみなさい」教師はこんなことばをよく使います。でもそれは安易に過ぎることばです。誰にも言えることです。「よく読みなさい」と言わなくても、子供がよく読んでしまった、知らない間に読みひたっていたというふうにもっていくのが、教師の教師たるどころでしょう。それあってこそ、教師という専門の職業が成立するのだと思います。「姿勢をよくしなさい」と言って指導するのは素人でもできることです。そういう、もう子供が聞き慣れてしまったことばを使うのではなく、自然に背筋がぴんと伸びるようにするのが、専門職たるゆえんだと思います。こういうときは、いいお話をするのが一番です。話に引き込まれると、子供は少し前に乗り出したような形で、腰がぴんと立ってきます。自然に姿勢がよくなっている、これが教師の技術です。

#### 「今日だけ教えているのではないのですから」

ある授業をして、それが完全に終わらなくても打ち切らなくてはならない場合もあります。あの子は分かっただろうか、この子は途中で切れてしまったのではないだろうかと心配になります。しかし、何十人かの子供をみんな同じ高みまで同時に連れて行かなければならないという気持ちを持っていると焦るばかりです。焦って苦しんでも、そういうことは成果が上がらないものです。今日だけ教えているわけではないのですから、あの子は、ここがわかっていないな、この子はここを読みとれていないな、と、私が覚えていればよいのです。そして挽回するというか、別の日、別の授業で、その力をつける工夫をすればいいのです。

この大村先生の言葉は、教師としての在り方を考えさせられます。教育現場は、いつも心穏やかに、落ち着いていられる場面ばかりではありません。子供たちと真剣に向き合えば向き合うほど苦しくなることもあります。だからこそ、教師として「何がしたいのか。」「何のためにそうするのか。」毎日関わっている子供たちの「何を育てたいのか。」そのために「自分ができることは何か。」先生方がじっくりと自分自身に向き合ってみることが大切ではないでしょうか。

(出典：大村はま「灯し続けることば」から一部引用)